

ダイキライ／ダイスキ

ドキドキムネキュン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

木組みの街で、無職になった青年は、友達のいない少女と出会う。少女の名前は香風智乃。

パンチラから始まる、最悪の出会いだった。

……恋愛に発展するのだろうか。(汗)

目次

1羽	可愛いパンツを見た	1
2羽	今度はパンツを見せた	6

1羽 可愛いパンツを見た

はあ……何もかも上手くいかねえ。

ため息をつきながら木組みの街を歩く俺。

ちっ。

なんだよこのメルヘンな街。

今の俺の荒んだ気持ちと正反対だぜ。

こちらら、バイトをクビになっただぞ。

たった今から無職なんだぞ。

フリーターですらないんだぞ。

今度の同人イベント参加する金すらねーんだぞ。

ちきしょうめ！

「おっ」

そんなことを考えながらぶらぶら歩いていると、なんかやたらと可愛い女の子を見つけた。

華奢で、ちっこくて、青いサラサラの髪で。

やべっ。

めっちゃ好みかも。

「野良ウサギです。可愛いです」

その小さな女の子が、そんなことをつぶやきながらしゃがみこんだ。

そう、この木組みのメルヘンな街にはウサギがいっぱいなのだ。

「!!」

ってか、制服のスカートでしゃがみこんでるから、パンツが見えてるじゃねーか！

俺は思わず凝視する。

す、すげえ。

こんな可愛い女の子のしゃがみパンチラが見られるなんて。

夢みたいだ。

歳、幾つぐらいなんだろう。

ちっこいとはいえ、羞恥心がない年齢にも思えないし。

か、かなりギリギリな感じ？

ウサギに夢中で無防備になっちゃってるのかな。

っていうか、もつとよく見えないかな。

こう、角度をちよつと変えて……。

俺は、通り過ぎるふりをして、女の子の正面に回り込む。

すると、ふかふかのウサギの頭をなでることに夢中の女の子の無防備なパンツが丸見えになった。

清潔感のある制服のスカートの中身は、青地に可愛らしい星マークがちりばめられた、股ぐりの部分にフリルのあるデザインだ。

スカートの中で蒸れたむんむんの空気感をはらみながら、惜しげもなく公開されている。

「ひゃっ。指を舐めてくれました。く、くすぐりたいです」

女の子が嬉しそうに身をよじると、パンツの皺の形も動く。

あ、あの縦線ってもしかして、この子の大切な部分の……。

「今日はとっても幸せです。いつもは懐かない兔さんが、懐いてくれました」

満足げにそう言って女の子が顔を上げた。

「あ」

真正面でパンツを凝視していた俺と目が合う。

「ひゃっ!!」

女の子が大慌てでスカートの裾を抑えた。

あああ。

パンツが隠されてしまった。

きつ。

女の子が、頬を赤く染めながら俺をにらんだ。

「い、いま、見てましたか？」

大人しそうだけど、勇気を振り絞った感じの声を出す。
ど、どうしよう。

俺は冷や汗ものだ。

ここは……。

誤魔化すか。

「え？ 見てたって何を？」

「あ、それはその……」

青い髪の女の子はもごもごと言葉を濁す。
やった。

大人しそうな子だからな。

自分から、「私のパンツを見ていましたか」とか指摘するのは恥ずかしいんだな。

こりや俺の勝ちだ。

こちらからむしろ攻めてやろうか。

「あのさ、見てたかっていったい何を？ なんか怒ってるようだけど？」

「あ、あう、そ、それはその」

「あ！ もしかして！」

俺はわざとらしく手を打つ。

「さっき、しゃがんでたから、パンツ見られたとか思ってるの？」

「〜〜!!」

女の子が真っ赤になってほっぺに手をやった。

「ち、違いますー！」

おいおい、自分で否定しちゃったよ。

俺はにやにや笑って問いかける。

「いや、確かにさあ、お子様パンツを大公開しちゃってたけどさあ。君ってまだ子供でしょ。そんなんに興奮して俺みたいな大人が見るわけじゃないでしょ。ああ、ガキだなあって思ってただけだよ。自意識過剰なんじゃないの？ 俺が見てたのは、その野良ウサギ。小学生のパンツに興味なんかないっての」

そこまで言うと、女の子が、半泣きになりながら頭にかぶっていた帽子を俺に投げつけた。

「しよ、小学生じゃないです！ 今年から中学生です！」

そう叫んでから、捨て台詞。

「オジサンのバカ！」

おお、オジサンって言われちゃったよ、俺まだ25なのに。

小つちやくて可愛いその女の子は、くるりと背を向けて走り去っていった。

「や、やりすぎたかな」
つぶやく俺。

その手元には、女の子が投げつけてきた帽子が。

これまた可愛いデザインのちっちゃな帽子。

さつきまで、あの子の頭に乗ってたんだよな。

サラサラの髪の毛に。

思わずクンカクンカする。

うん。

興奮する。

「どうしよう、これ」

帽子の裏を見ると、名前が書いてあった。

『I—B 香風智乃』

へえ、チノちゃんっていうのか。

つてか、香風つてどつかで聞いたような。

あ、駅近くの喫茶店か。

レトロな感じの純喫茶。

確かあそこの店長さん、香風さんじゃなかったっけ。

夜にバーやってる時にバイト先の店長に連れて行かれたことあるわ。

バーテン服につけてた名札が珍しい苗字だったから記憶に残ってる。

うぐつ。

バイトをクビになったの思い出した。

精神的ダメージが。

さつき脳裏に焼き付けたチノちゃんのパンツ思い出して回復しよう。

はあ、はあ。

チノちゃんパンツ……。

ひとしきり妄想して、ふと我に返った。

「返しに行くか、帽子」

学校用のものだろうし、ないと困るだろうからな。

俺は意外に優しい奴なのだ。

オジサンってのも訂正させたいしな。

2羽 今度はパンツを見せた

うる覚えで歩いてたけど何とかラビットハウスにたどり着けた。
でっけーな。

からんからん。

扉をあける。

だがあんまり客はいなかったというか俺一人じゃないか。

こここの経営大丈夫？

「あ、あの。すいませんまだ準備中なんです」

可愛い声が聞こえた。

チノちゃんの声だ。

俺は帽子をかざして挨拶した。

「よっ」

「あっー」

きつとチノちゃんが俺をにらむ。

嫌われてるなー。

「な、何しに来たんですか？」

「これだよこれ。学校の帽子。いるでしょ？」

「うぐっ」

言い返せないのか悔しそうに口を閉じた。

「それともいらない？」

「い、いります」

おずおずと受け取る。

手、ちっさいなー。

指先だけでも触れたいなー。

帽子を受け取ってからはたと気がついたように言った。

「で、でも！ どうしてここがわかったんですか？ や、やっぱり変態

さん…」

「違うって。相変わらず自意識過剰だね。帽子に名前書いてあるでしょ。珍しい名字だからすぐにわかったの。お父さんがやつてるバーに行ったことあるんだよ」

「そ、そうなんですか？」

「そういうこと」

父親に対する信頼度が高いのか、お父さんのことを知っていると言ったら急に表情が柔らかくなった。

お父さんっ子なんだね。

可愛いなあ。

「あの…」

そんなことを考えていると、チノちゃんがうつむき加減に一言。

「ご、ごめんなさい。帽子を届けてくれたのにひどいこと言いました。そ、それに、その…み、見ちゃったっていうのも私の誤解でしたし…」
真っ赤になっている。

俺が何を見ちやったのか（もちろんパンツだが）明言できないあたりも恥ずかしがり屋さんで可愛い！

っていうかちよろいなー。

実際には俺、君のパンツを見たくて凝視してたわけなんだけど。

その時、チノちゃんのお父さんが下りてきた。

「チノ、お客さんかい？」

「お父さん」

「あ、お邪魔しています」

俺はお辞儀した。

「おや君は」

お父さんが俺を見て言った。

「久しぶりだね。大沢さんところのバーテンダー君じゃないか」

「覚えていていただいて光栄です」

実はクビになったばっかの俺のバイトってバーテンダーだったんだよ。

駅前の老舗バー「おおさわ」で働いてたってわけ。

老舗ってのは名ばかりで代変わりしてからバカ息子がすげーチープな経営してるんだけどね。

このラビットハウスに以前来たのも、敵情視察だったってわけ。

「今日はどうしてこんな時間に家に？」

「娘さんの帽子を拾ったんですよ。で、名前が香風でしたから。タカヒロさんとこのかなと」

「そういうことか、ありがとう。礼を言うよ」

「いえ。こちらこそ、お昼は完全に閉めてると思いませんでした」

「人手不足でね」

タカヒロさんが自嘲気味に苦笑い。

「爺さんが死んでから喫茶を継ぐ人がいないんだよ」

それで閉めてたのか。

「前はお父さんが喫茶を？」

「そうなんだ。趣味というか道楽みたいなもんだったけどね」

俺は広い店内を見渡した。

「もったいないな」

「しようがないさ。どうすることもできない」

ため息交じりにそう答えるタカヒロさんを、チノちゃんが不満そうに見ていた。

それに気がついた俺はチノちゃんに声かけた。

「不満そうだな」

ちらっと俺を見たチノちゃんは、こつくりとうなづいた。

「私をもっと大きければ、おじいちゃんの後を継ぐんですが」

「いい心がけだなあ」

俺は感心した。

バーおおさわのバカ息子と大違いだ。

チノちゃんならちやんとお爺さんの遺志を継ぐだろう。

俺は言った。

「どこかのバカ息子とは大違いだぜ。俺をクビにしやがったバカ息子とはな」

その言葉にタカヒロさんが反応した。

「クビ？」

「ええ。実はもう俺、おおさわのバーテンダーじゃないんです。先日クビになったばっかです」

「どうして？ 君みたいな優秀でやる気のあるバーテンダーが」

「優秀つてのは買いかぶりすぎですが。やる気があるのが鼻についたんでしょよね。俺がうまい酒を出したいって言ってるのが気に入らないんだって言ってます。あの人、おおさわを老舗のバーじゃなくて、スナックかキャバクラみたいにしたいですよ」
「なるほど」

タカヒロさんがうなづいた。

「噂は耳にするよ。おおさわは、いい酒を置かなくなったって。どこにでもあるような酒しか置かなくなってきたってね」

「そうなんです。珍しいものを仕入れようとしたら嫌がるんです。そんな無駄な金をかけてどうする。はずれだったらどうする。決まったラインナップだけでいいんだって。リキュールの種類も減らされて、ろくにカクテルも作れなくなりました」

「経営者としては正しいが、バーとしては死につつあるね」

「はい」

タカヒロさんが、急に言った。

「ねえ、君。うちで働く気はないかい？」

「はあ!？」

唐突すぎる提案に驚く。

「お、お父さん?」

チノちゃんも驚いてるぞ。

「いや、さっき言ったように人手が足りないんだよ。君なら信用できる。前にうちの店に来た時にしゃべって、君は真剣にバーテンダーの仕事をしていると感じたからね」

驚いたけど、すつげーラツキーな提案だ。

バイトクビになって困ってたし。

しかも、タカヒロさんの店ならチノちゃんとも接触できる。

またパンチラ見れるかも!

「やります! やらせてください!」

俺は敬礼した。

「ありがとう。それと、頼みがあるんだ」

「なんですか?」

「確か君、遠くの街からこの街に出稼ぎに来たって言ってたね、依然」
「そうです。木組みの街とは縁遠いスラムの生まれですよ」

「じゃ、一人暮らしだね。賃貸？」

「はい」

「家に住み込まないか？」

「え!？」

さらに驚きの提案だ。

「実はね、チノの面倒を見てほしいんだ。ほら、バーテンの仕事をやってると昼夜逆転だから。ときどき交代でお昼の喫茶をやってもらって、その分夜にチノの相手をするとかうまくシフトを回したい」

夜にチノちゃんの相手。

エロい響きだ。

「いいのかな？ 俺が住み込んで」

チノちゃんをみる。

目をそらされたけど、

「べ、別にダメじゃないです」

とのお答え。

ちよつと気を許してくれてきた。

「じゃ、決まりだね」

「はい」

「さっそく、仕事着の大きさをチェックしようか。今夜からでも手伝ってほしいから。オヤジのお古がサイズ合うか着てみてほしい」

で、更衣室へ。

サイズは合いそうだな。

爺さん、ガタイよかったんだな。

しかし、股間のチャックが少しきつかった。

腰回りが俺より細いのか。

無理ではないが…。

そのときノックの音。

チノちゃんの声。

「あの、サイズは合いましたか？」

「何とか大丈夫」

「そうですか」

ガチャ。

チノちゃんが扉を開けた瞬間のことだ。

無理に閉めてたチャックが開いて俺のブリーフが丸見えになった。

「いゃん」

「きゃーっ!!」

チノちゃんが大声を上げる。

チノちゃんにパンツ見せつけちゃったぜ。

快感。

「お昼と逆になったなあ」

俺はしみじみと言う。

「ば、バカッ！ やっぱ嫌いです!!」

チノちゃんはほっぺ真っ赤っかにしてドアを閉めた。